



PHOBIA

第二節 共食い灰色

霜月音闇

イラスト：赤津豊

「貴方、名前は？」

「^{ミツタス}X-10^{ワンオ}」

「それは形式番号、貴方の名前じゃない」

「名前？ 名前……」

「ないの？」

「……うん」

「じゃあ、貴方は、『イオ』」

「イ……オ？」

「そう、10^{いちぢゅう}だから、イオ」

「イオ……僕は、イオ」

「そう、よろしくね、イオ」

差し伸べられる白い手の向こうで微笑む少女。その手をとつ

た瞬間、僕は生まれた。僕が、イオとして。この手は、沈み、

息を殺していた僕を暗いまどろみから引き上げた。

君が僕を、僕にしたんだ。

この地獄で、君だけが僕を知っている。

君だけが、僕の全て。

PHOBIA

第二節 共食い^{グレイ}灰色

「かはつ、げほつげほつ！」

暗闇の片隅で斐文がむせ返る。

（あ、寝てた……神無は？）

口の中に溜まった血を吐き出し、斐文はふらふらと立ち上がつた。

（何日目だろう、この暗闇で過ごすのは）

逃げ込んだあの日から何度まどろみに落ちたか数え切れない。ギリギリのタイトロップ、渡りきれない橋じゃない、何度もそう言い聞かせて嵐が過ぎるのを待つて震えていた。

ガンガンガンガン……。

打ち付ける音が聞こえる。

鉄に何かを打ちつける規則的で、嫌な音が。

闇を覗き込むと、そこには神無がいた。

黒い髪を乱し、一心不乱に壁に額を打ち付けている。頬を伝い流れ落ちる鮮血が床に血溜りを作り、無心で打ち付ける神無の顔を映す。

（壊れてないわよね？）

「神無」

その言葉に反応して神無の動きが止まる。

「……殺した……思ったか……」

神無は俯うつむいたまま、聞き取れない声を吐き出した。

「え？」

聞き返し、しゃがみ込もうとした斐文の細い首を、振り返った神無の黒い右腕が捉え、立ち上がりながら宙吊りにする。俯く神無は薄く微笑んでいる。

「俺を殺したと思ったか？ 斐文」

斐文の眼を射抜く神無の眼光、漆黒だったその右眼は仄黒く赤みがかり濁っていた。狂気に濁るその眼に斐文は戦慄を感じた。

(知っている眼だ。この眼は……神……)

「ぐっ！ があああ！」

斐文の思考を遮るほどの叫び声を上げ、左手で頭を押さえながら神無は膝から崩れた。

一時の静寂。首を押さえて荒い息をつく斐文の呼吸音と、神無の額から滴り落ちる鮮血が水溜りを叩く音だけが場を支配した。

「あ、ああああ、あああああああああ！」

静寂を粉々に打ち砕く叫びと共に神無は立ち上がり天を仰ぐ。そして、反動をつけ、振り下ろすように一層大きく壁に頭を打ち付けた。飛び散る鮮血と骨を削る異音が壁に華を咲かせる。

ゆらり、よろめくように壁から離れると、血に濡れた前髪をかき上げ、神無は斐文と向かい合う。

「朝はまだか？ 俺はもう、眠くないぞ」

黒く戻った神無の瞳と霧囲気に斐文は闇が去ったことを知り、胸を撫で下ろす。

(そう、生きているはずないわ。完全に消し去ったんだもの。)

私が、この手で)

手に握られた弾丸は二発。

(そう、これで、私は……)

「この感情は……この感情は！」

頭を押さえ、神無は慟哭する。激しい怒りの呼応。それに翻弄され、神無は自虐を繰り返す。

「が、あああ、がああああああああ！」

(怒り、その理由すら忘れてしまったのに。そう、何度も、壊すのね)

冷静さを取り戻した斐文は小さく息をつき、床に伏してもがく神無の脇腹をつま先で蹴り上げる。咳き込むように息を吐き出し、うずくまる神無の前にしゃがみ込んで、髪を掴み、顔を上げさせると斐文は微笑みながら囁いた。

「おはよう、神無。朝よ。さあ、出かけましょう」

(いいわ、その感情。その感情で、全てを壊しなさい。神無)

ふらふら立ち上がる神無の瞳は深く黒く、行き所の無い怒りで濁っていた。

「ヤハヴェ」

咳く言葉が頭の亀裂に響く。そう、ひび割れている。記憶を抉るように、決定的に欠けている。その傷に意味不明の言葉の羅列が響くのだ。

（ヤハヴェ）

何か忘れていて、と神無は感じた。頭に開いた大きな欠落。それは決定的だ、だが、思い出せない。いや、思い出そうとすればするほど怒りで頭に霞がかかるのだ。

（もお、いい、もお……いい）

心を閉ざし、思考を閉ざし、神無は歩みだした。暗闇の中を、蛇（斐文）の道案内で、決められた未来へ。



砂煙吹き荒ぶ瓦礫の街の中、一人の女性が何かを大事そうに抱えて走っていた。

静寂が支配する破壊された街、天井の強化ガラスから差し込む光は弱々しく街に微笑みかけていた。仄かな光の下、積み上げられた瓦礫の上で一人の男が胡坐をかいていた。

「くそつ、×一め、やっつけてくれるぜ」

苦々しく呟き、右肩を掴む。その指の間から青い炎が溢れる、右腕は肩から千切れ、傷口からは絶え間なく青い炎が滴っていた。

「グロリア」

女性は男の背中に声をかける。その声を受け、男は瓦礫の上に立ち、振り返った。弱々しい光に照らされ神々しく浮かび上がるグロリア。赤みを含んだ黒い髪、右眼を覆う白い眼帯、紅い左眼は狂気を孕み静かに燻っている。

「ジャンクか……右腕は見つかったか？」

不機嫌そうに言うグロリアに、女性は大切に抱えていた荷物を手渡した。布に巻かれた荷物、その布を解くと、中から千切れた右腕が現れた。グロリアはその右腕を手にすると千切れた箇所を押し当てる。押さえつけられ燻る青い炎はやがて小さくなり、煙を漂わせて消えていった。

「……よし」

右手を何度か握り、繋がったことを確認すると、二・三度肩をまわす。くすぶる煙が不完全な回復を物語っていたが、グロリアは気にも留めなかった。

「さあ、行くか、ジャンク。俺が最強である為に」

歪んだ微笑みを浮かべ、グロリアは歩みだした。何かに導かれるように、誘われるように。



破壊された日常の山。

土と木、瓦が入り混じる住居がまるで巨大な力で捻じ伏せられたかのように潰れ、散乱している。天殻に亀裂が入っているのだろうか、何処からか風が吹き込んできて、紙と砂埃を巻き上げる。

そんな場所に、神無は一人立ち尽くしていた。

その眼に映るもの、それは記憶の残骸。

置かれた一つのベンチ、そこには何者かが座っている。杖代わりのものに寄り掛かり、点滴を片手に持った影。その影は不敵に微笑み、神無の心の片隅に居座っている。

（俺は知っている、お前を。でも、思い出せないんだ。この怒りに、焦がされて）

俯く神無、そのはるか後方で斐文は瓦礫を漁っている。手に持った電子地図、そこには現在地に重なるように点滅する黄色い点映し出されていた。

「ここにあるはずなんだけど……あ、あった！」

そう言って斐文は瓦礫の中から何かを見つけ出す。掘り起こされ、白目の下に引きずり出されたもの。それは、剣。そう、ヤハヴェエのもっていた、レールガン内蔵の銃剣。斐文はそれを

布で包み、両手に抱えて神無の元へ走った。

「神無、行こう」

声をかけるが返事はない。俯いたまま目を閉じる神無。不意に何かに気付き顔を上げた。そして、迷いなく歩き出す。

「え、ちよつ、神無！」

斐文の呼ぶ声も神無には届かない。ただひたすら、神無は歩みを進める。瓦礫を越え、崩れかかった家をくぐり、ただひたすら前へ前へ。

「ちよつと、神無！」

必死についていく斐文、瓦礫をくぐり、大通りを抜けて、広間に着いたそこで、斐文は三人の人影を眼にする。

一人は神無、そして、神無と睨み合うように立つ男とその後ろに控える女性一人。

神無と超至近距離で睨み合う男、そう、こいつは、最強を謳う眼帯の男、『グロリア』。

「よお、久しぶりだな。イオ」

「イオじゃねえ、神無だ」

額を擦り合わせるぐらいの距離で、二人は殺意をぶつけ合う。一触即発。その引き金を引いたのは、グロリアだった。

ごっ！

不意の一撃。

打ち付ける頭突きで神無は膝をついた。

「よええ」

狂気を孕んだ眼光で見下ろしながら、グロリアは不敵に笑う。

「よええ、よええ、よええ、よええ！」

高らかに笑いながらグロリアはさらに追撃を加えるように右足で蹴りを繰り出す。神無はそれを両手で受け止め、体勢を立て直しながら距離をとる。額を伝う鮮血、それを拭おうともせず、神無はグロリアを見上げた。

「俺は最強、最強だ！ ははははははははっ！」

グロリアは笑いながら神無との距離を詰めるべく歩みだす。

神無は立ち上がり、それを迎え撃つ。

「イオ、お前は弱い、だから、奪われる！」

振り上げる右腕、それが振り抜かれる瞬間、神無の頭にノイズが走った。

敷き詰められた紅い絨毯の上に立ち、壁を見上げている。壁にかかっている一枚の絵。微笑む女性。美しく、優しい女性の絵。

『ママ』

言葉が走った瞬間、グロリアの拳が神無に突き刺ささり、吹き飛ばした。

「神無！」

歩み寄ろうとする斐文、それを遮るようにジャンクが斐文の前に出る。

「ダメ、邪魔させない」

静かに呟くジャンク。その身体からは静かな闘気が感じられる。睨み合うジャンクと斐文。銃剣を握り、斐文は静かに息を吐く。

一閃。

地から振り上げる銃剣がジャンクを捉える。

バチッ！

空气中に電流が走り、銃剣が弾かれる。反発し、剣先が大地を抉る。この感じは、バリア？

「あんた、人間じゃないわね」

その言葉に、ジャンクは小首を傾げる。

「かもね」

(デウス・エクス・マキナの影響を受けない機械なんて、存在しない。て、ことは、アンドロイド？ そんなものがまだ存在するなんて)

「最強、最強！俺は、最強だ！」

不敵に笑いながら神無に歩み寄り、襟をつかんで吊るし上げる。

「ぐっ」

「奪われ、踏み躪られ、死ね！ 死ね、死ね、死ね、死ね、死ね！」

言葉をぶつけながら、何度も頭突きを繰り返す。飛び散る鮮血と打ちつける狂気が二人の間でぶつかり合う。

「イオ！」

グロリアは身体をのけぞらし、ひときわ強く頭を振る。その頭を、神無の両手が受け止めた。

「俺は……イオじゃねえ……神無だ！」

その叫びとともに、神無は頭を振り下ろす。骨と骨がぶつかる鈍い音を響かせ、グロリアは体勢を崩す。その隙をつき、神無はグロリアを蹴り飛ばす。荒い息をつき、神無は額の鮮血を拭いた、同時に傷も拭い去られ、何もなかったように神無は立ち上がる。額を押さえ、俯くグロリア、歯を軋ませ、怒りに震えながら、片目で神無を睨みつける。殺気と狂気の入り混じった眼光が神無に突き刺さる。

「いてーじゃねえか。このくそがつ！」

そういつて懐に手を入れると薬ケースを取り出した。ゆらりと立つグロリアは額から鮮血を滴らせながら不敵に笑う。薬ケースを耳の横に持ち、軽く振る。錠剤のぶつかり合う軽い音が小さく鳴った。

「一気にけりをつけてやるぜ、イオ」

蓋を開けると、グロリアは一気に錠剤を煽った。飲み下される大量の錠剤。飲み干し、薬ケースを投げ捨てると、グロリアは笑う。

「さあ、行くぞ、イオ！ 殺し合いだ！ 勝つのは俺だな！」

青い炎が全身を包むように燃え上がり、グロリアを魔人に変

えていく。灰色の装甲、装甲によって塞がった右眼、牙を模造した顎に両腕に携えた折りたたみの刃。灰色の魔人は大きく口を開け、叫びに似た歓喜の声を上げる。その衝撃波で、周りの砂埃は消え、街全体が震えた。

魔人。

その姿を見た瞬間、神無の身体に怒りが走る。なんだかわからない、意味不明の怒りが。

(魔人は、魔人は！)

「殺さなきゃいけない！ 魔人は、死ね！」

ナイフを抜き、神無は一瞬で魔人に近付くと、振り上げる刃で装甲を切り裂いた。飛び散る火花と鉄を引つ掻く不快な高音が響き渡る。戻す刃を、力いっぱい魔人の脇腹に突き立てる。刃は通らず、弾き返される。体勢を崩しながら、神無は咄嗟に魔人から距離をとる。冷たい眼で見下ろす魔人は堰を切ったように笑い出す。

「はははは、よええ、よええ、いや、俺がつええのか？」

魔人は一瞬で神無の懐に飛び込む。神無がそれを認識した時にはすでに遅く、振り上げる拳が神無の顎を打ち抜いていた。宙を舞う神無、その足首を掴み、魔人は神無を大地に叩きつけた。

「ぐっ！」

背中を砕くような激痛に神無は呻きあげる。天を仰ぐ神無の

顔に影が落ち、魔人の膝が腹に突き刺さる。

「がはっ！」

「はっ」

血を吐き出し、苦悶に歪む神無の表情を見て、魔人は小さく笑った。

（そうだ、壊せ。君は一人でも、強いんだろう？）

「ああ、そうだ、俺は最強だ！ 誰にも負けねえ、だから一人でも大丈夫なんだ！」

首を掴み、神無を吊るし上げる。

「イオ、お前は悲しいぐらいに弱くなったな。……死ね」

手首の刃が回転し、両刃の剣と変わる。右手を引き、刃の先を神無の胸に向ける、そして、一気に貫いた。肉を押し分け骨を貫く嫌な音が静寂に響く。

（え？ これで終り？）

胸を貫く刃に、神無は本能的に死を感じた。

（これで終り……そんなの……）

《いいわけねえだろ！》

「がはっ！」

頭を、いや、心を引き裂くような怒りの声、神無は大量の鮮血とともに青い炎を吐き出した。

「ああ、あが、ああああ！」

炎を吐き出しながら、神無は刃を掴み引き抜いていく。掴む

その手は黒く変わり、胸の傷口からは鮮血の代わりに青い炎が噴き出す。

「魔人、殺す、魔人！」

搾り出すように呻く神無。その身体は次第に黒い魔人へと変貌を遂げていた。その姿を見て灰色の魔人Ⅱグロリアは高らかに笑う。

「そうだ、イオ。それだ、魔人になれ！ なっても殺してやるがなあ！」

抜こうとする神無に笑いかけながら、グロリアは刃を力の限り押し込んでいく。

「ぐうう、あああああああ！」

黒い咆哮。

青い炎が消え、神無は黒い魔人に変貌した。

「魔人、殺す」

狂気と怒りで濁った眼光、殺意をこめてそう呻く黒い魔人に、もう神無の面影はなかった。胸に刺さった剣から黒い魔人は両手を離し、フリーになった右手で、グロリアの顔を殴りつける。

灰色の装甲に亀裂が走る。よろめき、倒れそうになるグロリア、それを許さぬように左手でも殴りつけた。翻弄されるグロリアはいったん距離を取るために剣を引き抜こうとする。が、黒い魔人はそれを許さない。胸に刺さった剣を、左手で抑え、もう一度右手でグロリアの顔を殴りつける。飛び散る灰色の装甲片。

殴り飛ばされ倒れこむグロリアを片手で支え、黒い魔人は笑った。

「どうした、殺してくれよ。弱い魔人」

胸に刺さった剣を抜き、グロリアを開放する。ふらふらと座り込み、青い炎を吐き出すグロリアはうなされるように呟き立ち上がる。

「弱い、弱いだと……俺が、弱いだと！ 違う！ 俺は強い！俺は最強！ 最強なんだ！」

腕を振り翳し襲いくるグロリアを見て、黒い魔人は軽蔑をこめて言い放った。

「あんまり最強最強いうなよ、弱く聞こえるぞ」

ぶつかり合う殺意と殺意。

拳と剣。

一撃の衝突で決着はついた。

青い炎を撒き散らせながら宙を舞うグロリアの右腕、千切れただけではない、脆く砕けたのだ。弾いた左腕を振り抜き、さらに前に進む。飛び込んだグロリアの懐で黒い魔人は笑った。

一撃。

黒い魔人の拳がグロリアの腹を貫いた。

静寂。

落下し大地に突き刺さるグロリアの右腕は青い炎を灯し、幻想的に揺らいでいた。

「罪の、痛みだ」

拳を引き抜き、黒い魔人は笑う。グロリアは傷口を押さえ、地に伏した。

（……………だ）

「ん？」

（……………誰……………）

「んだよ、うるせえなあ」

耳を押さえ、黒い魔人は顔をしかめる。

（お前は、誰だ！）

頭に激痛が走り、黒い魔人はよろめく。胸の傷から溢れ出す青い炎、それは形を持ち、黒い魔人に襲い掛かった。胸の傷口から生えた腕が黒い魔人の首を絞める。

「くっ、だよ、てめえ！」

（それは……………こっちの……………台詞だ）

「てめえ、模造品か。もお、てめえの出番は終わったんだよ、とつとと消えろ！」

（模造品じゃない……………俺は……………神無だ！）

「主張してんじゃねえ！ 偽物風情が！」

小競り合う黒い魔人と思考。その下で、グロリアが蠢く。

「俺は、最強……………最強なんだ」

そう呟きながら、右眼を覆う装甲に手をかける。そして装甲を力ずくで引き剥がした。装甲の奥にあったもの、それは黒い

眼球。力を宿した、魔眼。

「が、ああ、あああああああああああ！」

その叫びに黒い魔人は気づく、だがすでに遅かった。

斜めに走る光の軌跡。それは大気ごと黒い魔人を切り裂いた。

「な、に」

装甲の切り口から青い炎が噴き出し、ゆっくりと後ろに倒れこむ。追い討ちをかけるように空中に無数の透明な剣が現れる。

「ぐううう、あああああああああ！」

黒い眼球から赤い涙を流し、グロリアは激痛で叫んだ。その叫びに呼応し、無数の剣は黒い魔人の顔に次々と突き刺さる。

剣の隙間から仰ぎし空。

走るノイズ。

狂ったように叫び続けるグロリア。

何もかも、遠く、遠く。

遠くで子供競り合う斐文とジャンク。最初に異変に気付いたのはジャンクだった。

「っ！ グロリア！」

踵を返し、ジャンクは走り出す。後ろで銃剣を構える斐文はあつげに取られた。が、すぐにその異変に気付く。

「何……あれ……」

不意に見上げる空、そこに見えたのは天を刺す巨大な剣。その剣は神無がいたところからそびえ立っている。まさか……。

斐文は走り出した。言いようの無い不安に駆られた。

（そんな、まさか。いえ、ありえない。神無が負けることなんて）

鋭利な刃物で切り刻まれた瓦礫群を抜け、剣の袂に斐文はたどり着いた。そこで見た光景は。

無数の剣を顔に刺し、青い炎を上げながら仰け反り倒れる黒い魔人。

そして、黒い眼球から赤い涙を流し、叫び狂う灰色の魔人。

「が、ああ、がああああああああ！」

一層大きな叫び。

巨大な剣は天を裂き、天殻が崩れ落ちてくる。

「神無！」

斐文の声は届かない。

刺さった剣の隙間から仰ぎ見る刻まれた空。

声が聞こえる。

この騒音の中で、確かに、神無に届く声。

闇の中で、声が。

ノイズ。

闇の中で子供が泣いている。

『ママ、ママ、ママ。一人はやだ、寂しいよ、ママ』

ノイズ。

〈君は誰？ 僕は……〉

◇

流れる水の音。

暗い部屋で一人、少年は洗面所に向かっている。

一心不乱に手を洗う少年。

〈違う、僕じゃない。違う、違う、違う、違う！〉

血に染まった両手が、さっきまでの惨劇を物語る。

〈僕は殺してない。僕じゃない、僕じゃない、僕じゃない！〉

この手は奪うだけの手じゃない。

あの子の手のぬくもり。

それを、この血の気持ち悪い温もりがかき消そうとしている。

〈嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ！〉

一心不乱に手を洗う。

半泣きになりながら、己の行為を否定しながら。

俯く少年を鏡だけが見詰める。

鏡の中の少年が不意に顔をあげ、不敵に笑う。

《そうだ、殺したのは、俺だよ》

◇

(俺は、誰だ?)

何度も繰り返す自問自答。

(思い出せない、いや、無いんだ)

最初っから、何も。

(俺はどこにもいない、どこにもいなかったんだ)

グロリアとの戦闘から三日、死に物狂いで脱出した神無と斐

文は地図が指し示した次の街に何としかたどり着いていた。

『神無……貴方は神無よ。生きて、生き抜いて、死に続けなさい』

斐文の背で聞いた呟きが耳にこびりついてはなれない。

(俺は神無、死に続ける。神無)

顔を巻く包帯の隙間から、神無は天井を見詰める。

(俺は本当に、神無なのか?)

揺らぐ。

細い足場、先端に立つ感覚。そんな危うい存在。

(俺は、俺なのか?)

誰もがイオと呼ぶ。

(俺は神無だ。俺は、俺は)

頭がズキズキと痛む。何かが頭の隅で叫んでいる。その声を

消すように誰かが呼ぶ。

(やめろ、やめてくれ！ お前は誰を呼んでいるんだ！ その

声を、記憶を、俺の証を、消さないでくれ！」

身体を起こし、頭を押さえる。

（誰か、教えてくれ。俺は、誰なんだ？）

「神無」

ふと、声をかけられ、神無は顔を上げた。視線の先に立つ斐文は柔らかな表情で神無に歩み寄る。

「気分はどう？」

「すごく悪い」

「そう、でも、ゆつくりはできないわよ。また、魔人がくるから」

障子戸を開け放ち、部屋に光を入れる。そして、窓を開け放つと、その縁に腰をかけた。

「魔人が、くるか」

神無はため息混じりに呟く。

しばらくの沈黙。

それを破り、神無は斐文に話しかけた。

「斐文、俺を置いていってくれ。俺は、神の塔にはいかない」
重々しく言う神無の言葉に、斐文は少し微笑んで答えた。

「いいよ」

斐文は窓枠から立ち上がると、神無の側に腰を下ろす。

「あんまり自分の話すの好きじゃないんだけどさ。これで最後かもしれないから、言うね。私はね……復讐者なの」

「復讐？」

「そう、復讐。天に唾はく復讐よ」

笑いながら斐文は話す。

「私の街はスネイルのずつと端、際の際にあつてさ。すごく田舎ですごく嫌ですごく好きだった。でも、無くなっちゃった。神の、選別で」

「神の選別？」

「そう、毎年繰り返される儀式。なんの前触れもなくリスカが街に流れ込んできて街を消す。親も、兄弟も、街の人も、動物も、何の区別もなく、消していく。それが、神の選別。それを行うのが神の塔にいると言われる世界の支配者。私はそれに、復讐するの」

笑顔で語ってはいるが、その瞳の奥は怒りで燃えていた。

「わかってるよ、復讐なんてくだらないって。やり遂げたところでお金にもならないし。狭い空間の中で生きるには間引きが必要だってわかっている。でも、理屈じゃないんだよね。奪われた者にとってはず」

斐文は立ち上がり、手に持った銃剣を肩にかける。その姿は雄雄しく、荒野に咲く一輪の華のようだった。

（俺は、俺は）

咄嗟に耳を塞いだ。

ノイズ、ノイズが聞こえる。

身体の中から、頭の中から。

(……罰を、……罰を)

軋む、揺らぐ。

(俺は、何を信じればいい)

「神無！」

斐文の声に神無は我に返る。

「リスカ。街にリスカがきてる！ まさか、選別？ ここでも

……くっつ

窓の外を見ながら叫んでいたが、すぐさま部屋を飛び出した。

神無はゆっくりと立ち上がり、窓の外を見る。闊歩する機械の

群れ、破壊される街。

「奪われる」

ノイズ。

逆光に浮かぶ背中。

解^ほれ、突風で風に舞い上がるバンダナ、手にした煌く銃剣。

鮮血を流しながら男は不敵に笑う。

(なに、見失ってるんだよ、お前は、ここにいるだろ)

ノイズ。

「ぐ、がああああああああああ！」

(俺だ、俺だ俺だ俺だ俺だ！)

「俺はここにいる！ 俺は、神無だ！」



「くっつ、たあああ！」

銃剣を振りかざし、リスカを薙ぎ払う。斬っても斬っても湧

いて出るリスカに、斐文は明らかに疲弊していた。身体と不釣

合いで重い銃剣を振り回す。その行為だけでも疲れるのに、こ

の量だ。街を埋め尽くすように何処からともなく湧いてくるリ

スカ、間違いない、これは、神の選別だ。

「くっつ、そおー！」

銃剣を振り上げ斐文が猛る。怒りでもない、憎しみでもない。

何も感じなくても、誰も救えなくても、斐文は銃剣を振るう。

きつと朽ち果てる、その日まで。

キーン！

突如、遠方から空を裂く超高音が衝撃となり街を走る。ゴミ

屑のように舞い上がる金属片と綺麗に刻まれ吹き飛ぶ四方のコ

ンクリートたち。

(この感じは……まさか)

砂煙の向こう、綺麗に刻まれたリスカたちを踏み躪りながら、

男が歩いてくる。風に翻る黒いロングコート、光を乱反射させ

輝く無数のネックレスとシルバーアクセサリー、黒み掛かった

赤い長髪の間から見える黒い眼帯のシルバー髑髏、その眼の白

黒オツドアイが不気味に輝く。姿はだいぶ違うが、あの男は……間違い、灰色の魔人『グロリア』。

グロリアは斐文の横に立ち、薄く笑う。

「くだらねえ、最強の俺の前じゃ、こんな紙屑、千切るが如くだぜ。なあ、123号」

「最悪、ナンバーで呼ばないでよね、グロリア」

「イオは何処だ？ うるせえんだよ、頭の中でガタガタ、ガタガタ」

こめかみに人差し指を突き立て、ギリギリとねじ込むように押さえる。焦点の合っていない左眼は狂気と殺意に満ち満ちていた。近づくものを全てを気圧すぐらいに。

「イオは、いないよ」

「あ？ ……んなわけ、ねえだろうが！ わかるんだよ、俺には。魔人は魔人同士引き合うつてのがなあ」

グロリアから放たれる殺意が場を支配し、空気すら刃のように肌に突き刺さる。

(逃げる)

そう頭に過ぎった瞬間、重い一撃が背中を叩いた。

「がっ！」

一瞬間に浮いたかと思うと、後ろから何かが飛び掛り、斐文を拘束した。手を交差させ、斐文の首を固定し、両足で斐文の手を制する。

「くっ、失念してたわ。あんたの存在」

揺れる紫のショートヘア、両手にはトンファーを装備し、

感情の無い瞳で斐文を見下ろす女性、そう、グロリアに付き従い、ともに生きる者『ジャンク』。

「チエック」

感情の無い声で詰みを告げるジャンク。確かに今の斐文はチエックメイト状態といえる。

(こんなはずは………こんなの、計画にない)

自分で捻じ曲げた計画を後悔するわけじゃない。でも、こんな、ここで終りなんて。

「お前を弄っていたら、出てくるか？」

ゆっくりと近付いてくるグロリア。

「何処から刻んで欲しい？ 腕か？ 足か？」

(私の復讐が、こんなところで………こんな！)

悪足掻く様に立ち上がるうとする。首、両手を押さえられ、上半身は動かない、それでも、涙が出た、悔しくて、殺されることがじゃない、何も出来なかったことが、悔しかった。

(私は戦える。一人でも、戦える。戦えるんだ。誰にも頼らない、誰にも本心は見せない。私は、私は！)

「神無ー！」

斐文は叫んでいた。利用するだけだと見下していた男の名を。くるはずもない男の名を。

その瞬間、空気が変わった。

「斐文」

聞いたことのある声に斐文は顔を上げる。

(まさか、そんな)

斐文とグロリアの間に立ち塞がる背中。ゆるい風に揺れる黒髪と顔の包帯、雄雄しく立つ後姿。今までの旅で見た弱弱しさは微塵もなかった。あの背中へは、覚悟を決めた男の後姿だ。

「斐文、俺の名を呼べ」

「……神無」

「そう、俺は神無、神無だ！」

確信したように神無は言葉を力強く繰り返す。

「お前が俺を呼ぶ限り、俺は神無でいられる。お前が俺を俺にするんだ！ さあ、呼び続ける！ 俺の存在を肯定し続ける限り、俺はお前を守り続ける！」

そう言い放つて神無は不敵に笑う。今まで見せた事のない楽しそうな微笑み。そう、今、ここで神無は生まれた。存在したのだ。

振り翳す右手、そこに光が集まりナイフを形成する。そのナイフを逆手に持ち、神無は叫ぶ。

「変・身！」

その叫びと同時に神無はナイフを胸に突き立てた。傷口から迸る青い炎が神無の身体を包み、激しく燃え上がる。それを押

さえ込むように、黒い装甲が神無の身体を包み込む。

黒い魔人。

固い決意を秘めた青い眼光、怒りと困惑で歪んでいた姿は矯正され、装甲は今までにない鋭さとしなやかさを得ている。胸に刻まれた傷痕からは絶え間なく青い光が輝く。

「俺は魔人、魔人を狩る魔人、神無だ！」

その猛りを嘲笑い、グロリアは懐から薬ケースを取り出す。

そして、耳の側で一度振り、蓋を開放した。

「俺は、最強だ。最狂で、最凶だぜ」

薬の錠剤を一気に煽る。放り投げられる空の薬ケース、それが地面につくまでにグロリアは灰色の魔人へと変貌していた。狂気に満ちた真紅の左眼が神無を睨みつける。両手を広げ、折りたたまれた刃を伸ばすと、グロリアは大きく天に吠えた。

敷き詰められた紅い絨毯の上に立ち、壁を見上げて一人の少年。壁にかかっている一枚の絵。微笑む女性。美しく、優しい女性の絵。それは、僕のママ。

「ママ、僕、今日も生き残ったよ」

少年は無邪気に笑い壁の絵に話しかける。

「僕は強いよ、誰にも負けないよ。だから、褒めてよ、ママ」
無邪気な微笑み。

絵画の女性も優しく微笑んでいる。

ママ、ママ、ママ……。

振り払うグロリアの斬撃を左手で受け、神無とグロリアは急接近する。睨み合う狂気の赤眼と決意の青い眼が交差する。

「刻んでやるぜ、イオ」

「間違えんじやねえ、俺は、神無だ！」

弾き合い、お互い距離をとってから、再度ぶつかり合う。狂乱で振り回される両腕の刃を神無は的確に刃の腹を狙って弾く。そして、タイミングを計って反撃の一撃をグロリアに叩き込んだ。

「ぐっ！」

うめき声を吐き出し、グロリアの攻めが止まる。それを機に、攻守は逆転した。攻める神無の連撃に、灰色の装甲が砕け散る。左の一撃がグロリアの顔面にめり込み、装甲に亀裂が走る。右眼を覆う装甲が砕け、その隙間から黒い光が見えた。その瞬間、神無の左腕が斬り飛ばされた。

「なっ！」

グロリアの右眼装甲の奥に見える黒い眼球、そうだ、それがグロリアの隠し玉、力を宿した魔眼。砕けてぐらつく右眼装甲を引き剥がし、グロリアは笑う。

「俺は最強、最強なんだ、一人でも大丈夫なんだ。いくぞ、最強の剣、『天剣・絶刀』！」

その言葉に呼応して黒い眼球が赤い涙を流す。大気が揺らぎ、グロリアの側に無数の透明な剣が現れた。それは、全てを断ち切る、最強の剣。

「うあああああああああ！」

グロリアの叫びと共に無数の刃は神無目掛けて打ち出された。襲い来る刃を交わし、神無は吹き飛んだ左腕を拾い上げると、眼前の刃を振り払った。切断され宙を舞う左腕の破片、そして、刃は何事もなかったかのように神無の右眼に突き刺さった。(なるほど、さすが最強の剣だ。よく切れやがる)

剣は黒い装甲をまるでバターを切るかのように切り裂き、後方に突き抜ける。つかんだ左手は黒い魔人の手の中で青い炎に変わり、魔人の中に還元される。左腕の傷口から迸る青い炎、それは輪郭を持ち、瞬時に左手を形成した。

「があああああああああ！」

グロリアの叫びと共に透明の剣が形成されては降り注ぐ。「お前が最強の剣なら、俺は、最強の拳だぜ」拳を握りしめ、神無はそこに力を集中させた。拳に纏わりつくように燃え上がる青い炎、それを振り翳し、神無は襲いくる透明な剣をなぎ払った。

「ぐっ！」

簡単なことだ。刃は斬れる、だが、剣の腹の部分は斬れない、斬れるように出来ていない。ただ、それだけのこと。つまり、

ズキッ！

「ぐっ！」

頭に激痛が走り、神無は膝をついた。

ノイズ。

燃える、燃える部屋、その中で、少年が叫んでいる。

「ママ！ 嫌だ！ ママ！ 一人にしないで！ ママ！ ママ！ ママ！」

燃える絵画、その前で少年は叫び続けている。

絵の中で優しく微笑む女性、それは徐々に炎に犯され、朽ち果てていく。

「嫌だ！ ママ！ ママ！ ママ！」

叫ぶ少年の後ろに、佇む、イオ。

「弱いから奪われる。弱いから、死ぬんだ」

叫ぶ少年は振り返り、殺意のこもった目で、イオを睨む。

「そして、お前も、弱いから、死ぬ」

イオは銃を構え、少年の右眼に銃弾を打ち込んだ。そして、何度も、何度も引き金を引く。息絶えるまで。

「があ！」

（はあはあ、このビジョン、なんなんだ。記憶の、一部なのか？）
キンツ。

ジッポの蓋を開けるような軽い音に、神無は顔を上げる。目の前に立っていたのは、ジッポを手にした斐文。斐文はジッポ

に火をつけ、バラされたリスカに向かって放った。リスカを心に広がる水溜り、そう、それは、ガンリン。

ボオ！

一気に燃えあがり、赤い炎が街中を包み込んだ。

「斐文？」

焦点の合わない目で斐文はじっと炎を見つめている。燃え上がる炎は大気を焦がし、天を突くように揺らめく。

「あ、あああ、あああああああ」

炎に取り囲まれ、グロリアは怯え、狼狽する。

「嫌だ、奪われる、嫌だ、嫌だ」

「……無様だな、グロリア」

神無は狼狽するグロリアを見下し、ため息混じりに吐き捨てる。

「トドメを、刺してやる」

力をこめる右腕に周りの炎が絡みつく。絡みついた炎は青い炎と混ざり、赤紫の炎を形成する。

「悔いろ、お前の生を」

「DEAD END」

間に割り込むように飛び込むジャンク、大気を走るバリアの電流、神無の拳は、その全てを貫いた。

千切れ飛ぶトンファーとジャンクの右腕、拳はジャンクの腹部を貫き、そのままグロリアを打ち砕いた。

「私……護る……家族……」

壊れたラジオのように単語を吐き出しながらジャンクは神無を睨みつける。神無は無造作に拳を引き抜く。

胸に大穴を開け、グロリアはゆっくりと後ろに倒れる。再生のはじまらない傷口からは絶え間なく赤い炎が上がつている。

「嫌だ、嫌だ、嫌だ。怖い、怖いよ、ママ。一人はやだよ」

震える手を宙に伸ばし、必死に何かを探す。その手を、ジャンクは優しく包み込んだ。

「大丈夫です、私がいいます」

悲しげに微笑むジャンク。満たされることの無い心を、二人は埋め合わせられるのだろうか？ ジャンクの優しさも、グロリアの眼にはうつらない。一方通行同士の補完し合い。

「やめてよね」

静かな呟きと共に、銃剣がジャンクとグロリアを貫いた。冷ややかに見下ろす斐文は銃剣を引き抜き、肩にかける。

「機械が家族ごっこなんて、気持ち悪い」

機能を停止したジャンクと音もなく崩れるグロリア。黒い装甲は青い炎となり、宙に消える。顔を覆っていた鬱陶しい包帯も、その炎に焼かれ消えた。宙を見る漆黒の瞳。神無はグロリ

アから黒い眼球を拾い上げる。そして、口に放り込むと、喉を鳴らして飲み下した。その姿を見て、斐文は不安げに神無を呼ぶ。

「^{カムイ}神威？」

その声に反応し、神無は斐文を見る。漆黒の瞳に赤みが差し、鈍色に輝いている。その瞳で斐文を見詰め、神無は不敵に笑った。

「違うな……俺は、神無だ」



声が聞こえる。

ステレオで響く声だ。

俺を、いや、イオを呼んでいる。

五月蠅い、黙れ。

俺はイオじゃない、神無だ。

魔人を狩る魔人。

そうだ、俺はここにいる。

(続く)